

森 泉 著

『アメリカ〈主婦〉の仕事史』

——私領域と市場の相互関係

金野美奈子

(東京女子大学現代教養学部教授)

〈消費する自由〉を広く実現し、人類史上例をみない規模で大衆消費社会を出現させた国、アメリカ。本書はアメリカ経済社会の成り立ちを、生産の側ではなく消費の側から、主婦の仕事——家事・育児も含めた広い意味での主婦の働き——に焦点を当てて描き出す。家庭はつねに市場と相互作用しながら市場を支えてきたが、その家庭における消費を取り仕切ってきたのが主婦である。

アメリカは離婚率だけでなく再婚率も高く、非移民の白人に限っても他の先進国と比べ高い出生率が保たれている点で特徴的な社会である一方、母親の労働力率や女性管理職比率の高さでも知られる。本書は、市場労働にも家族形成にも女性が積極的に関わる今日のアメリカ社会を生んだ、歴史的経験の一面を探る試みでもある。

本書の物語は二度の「消費革命」を軸に進む。18世紀後半から19世紀初頭の第一次消費革命、そして20世紀への世紀転換期に始まる第二次消費革命である。第一次消費革命は何よりも庶民レベルでの広範な市場参加によって特徴づけられる。上流階級が明確な社会的身分として存在しない社会では、よりよい生活をめざす庶民の消費欲を抑制する力は弱かった。この時期における農村部への貨幣経済の浸透、非ギルド的な消費財生産によって市場に供されたモノの多様性も背景として、家庭は「消費センター」としての色合いを次第に濃くし、消費こそが家族生活を整える主婦の重要な仕事となっていく。

第二次消費革命期には、主婦の仕事をひとつの専門職ととらえ、あるべき姿を意識的に探究する機運が高まる。その要諦とされたのは、消費をたんなる



●ミネルヴァ書房
2013年9月刊
A5判・400頁・
本体6500円＋税

●もり・たかし
北海道大学名誉教授。

浪費としないための活動、当時の表現でいう「収入の統治」である。大衆消費社会にますます組み込まれていく家庭を切り盛りする主婦には、選択肢があふれる市場で何を買うかを合理的に決めるスキルが不可欠とされるようになる。経済社会の家庭消費への依存が強まるなか、消費の実質的決定権を握り「ミセス・コンシューマー」と呼ばれた家庭の主婦は、消費プロフェッショナルとして生産への発言力も獲得していく。主婦的なものの価値の主張は、学術分野としての「ホームエコノミクス（家政学）」の確立をめざす動きにもみられた。

主婦の仕事を結節点とする家庭と市場の相互関係が本書の縦軸だとすれば、本書の横軸といえるのが、専業主婦擁護の潮流と女性の市場労働進出の潮流とのせめぎ合いである。このような一見相反する動きが、なぜ相携えて歴史に繰り返し登場するのか。消費センターとしての家庭と、家族のための消費を取り仕切る主婦に照準することで、ひとつの回答が浮かび上がる。

アメリカ経済社会は根本のところ、消費の場である家庭に支えられてきた。このような構図のなかでは、家庭という場を象徴する専業主婦の存在がとりわけ重要性を帯びる。主婦の仕事のプロフェッショナル化の動きがこれを補強した。他方、大衆消費社会ではよりよく消費するためますます多くの収入が必要となる。しかも育児に関してすら政府による支援がミニマムな社会で家族生活は徹底的に「市

場という〈公〉」に対する〈私〉と位置付けられ、経済的必要な大きい女性ばかりでなく〈公〉の場でのステータスや自己実現を求める女性たちもまた、市場労働へと駆り立てられていく。

市場労働参加が既婚女性の仕事のますます大きな部分を占めるにつれ家庭が近年被っている大きな変化にも、筆者の目は向けられる。家庭生活が生産効率の論理に従う度合いの高まりや、主婦自身もまた

その担い手である消費の個人化の進展によって家庭という場の存立基盤が掘り崩されつつあるなかで、主婦の仕事には今や、家庭生活の主体であるはずの家族という存在自体を成り立たせ続けるための働きが加わった。統計的数値の背後に、主婦たちの働きによって日々保たれる危ういバランスの上に成り立つ、アメリカ社会の姿が見えてくる。